

内陸のくじら

ペクウオイと呼ばれる家が、川の民の世界の中心に近いコテプの村にある。川の民の習わしで、裕福で高貴な人たちは、自分の家に名前をつける。ペクウオイのような名前を。

コテプの村は深い谷にあって、上の方の陽あたりがよく見晴らしのよいところには、名前のある家が建ちならぶ。下を見れば、家並は乱れはじめ、名前のついた家もぼつぼつとしかない。谷底の陽のあたらないところには、貧しい者たちの、みすぼらしく、いまにも倒れそうな、名のない家がある。

ペクウオイの、陽あたりのよいテラスの組石の上に立てば、上流の川が曲がるところから、川下のずっと遠くまでが見通せる。戸口のまるい柰木には、ていねいな彫りものがほどこされている。壁と屋根には、巧みな手斧のあとが残るレッドウッドの厚板が使われている。家のなかは、雨がふっても乾いていて、強い風も入ってこない。

ずつとずつと昔には……、それほどベクウオイは昔からあるのだが、夜も昼も、かまど穴の火を絶やすことはなかった。大部屋の四方と、軒下の棚には、宝物のつまつた長持と、大きな籠がいくつもあつた。籠には、海や川、藪や木々から、とられたものがつまつていた。乾燥したものも、新鮮なものも。火のそばの凹みには、鹿革のブランケットが置いてあつた。心地よくすわつたり、温かく眠るために。

ネネムと、その父親と母親、祖父とが生きていたころには、ベクウオイはそんな家だつた。ネネムと、その高貴な一家は、川上から川下まで、だれからも知られ尊敬されていた。ネネムがベクウオイにいたころは、ジャンピング・ダンスの儀式には、必ずベクウオイにある狼革のヘッドバンドとジャコウネコの前掛が使われた。鹿革ダンスにも、ベクウオイからの、とても高価でまつ白な鹿革を欠かすことができなかった。

ネネムには、柔和でリズムミカルな美しさがあつた。まんなかで分け、ミンク革で縛つた豊かな髪は、まつすぐに肩から乳房にかかり輝く。切れ長の目に三日月の眉、そしてやさしい口もと。その上品な造りの、穏やかな顔だちを、磨いたアワビの耳輪が縁どる。小柄なネネムの、軽やかで誇り高い足どりは、とてもなめらかで、歩くときには、貝殻ビーズをたくさんつけた首飾と、種子をつなげた何百本もの紐の前だれと、アワビと黒曜石のペンダントを下げた鹿革のスカートのため、シュ・シュ・シュ・シュという衣ずれの音だけが聞こえる。

ネネムが結婚するときには、最高の代価を受けとろうと父親は考え、ネネムが選ぶ相手はもつ

とも相応しい男たちのなかからだと思っていた。ところが、まるで正反對のことが起きてしまった。ネネムが好きになってしまったのは村の若者、やもめで貧しい母親の、名もない一人息子だった。若者と母親が住んでいたのは、川ぶちぞいの、いちばん粗末な小屋のひとつだった。ほんとうに貧しく、だれにも知られていない親子だったので、いまの時代の私たちには、その若者の名さえまったくわからない。

それでも、ネネムの名無しの恋人は、人物や人柄の良さ、そして取り柄があつたにちがいない。ネネムがほんとうに、すっかり好きになってしまったのだから。ネネムとその若者は、ネネムのお腹に子どもができたことを知り、ネネムの家族のところに行き、夫婦になりたいと申し込めた。ネネムの両親と家族は、驚き、怒り狂った。若者が花嫁の代価として持参できる財貨などなく、ネネムの一家にとって侮辱以外のなにもでもなかったからだ。

それはわかっていたので、若者はネネムの父親にこう申し込めた。「あなたの娘と正式に夫婦になりたいのです。彼女をいただきたい、それに値する男になりたいのです。そのためなら、そうせよと言っていただけなら、あなたのために忠実に働き、あなたがせよと命ずることは何でもし、あなたのよき息子となります。もし、そう言っていただけなら、この私を殺してください。それが当然です」と。しかし、誇り高い父親には、あまりにも身分ちがいのいやしい若者を、手にかけて殺すことなどできなかつた。「それならば、私をあなたの奴隷にしてください——どんな仕打ちでも、あなたの思いのままにしてください」と若者は言った。